

解 説



品質工学のつながり (7)

Connection of the Quality Engineering (7)

江末 良太*¹

Ryota Esue

五味 伸之*²

Nobuyuki Gomi

山村 英記*³

Hideki Yamamura

1. はじめに

本稿は、東京電機大学での研究を通してのつながりを中心に、品質工学とのつながりや、現在の立場とのつながりなどを、当時の在籍学生3人のそれぞれの体験を基に記したものである。この世代は、田口玄一から直接的に知己を得る機会があった最も若い年代で、時期的には2004年から2006年くらいである。結果的にその後、品質工学が中心となった関わりやの技術者・研究者生活を送って現在に至っている。一般に品質工学を行う者の多くは企業の研究者としての関わりであることが多く、学生として関わった例は非常に少ない。2017年の現在でも、品質工学に深く関わっている学生数はそれほど多くはないのが現状であるが、当時、学生としてどう関わったかを中心に、さまざまな経験を述べるものとする。

2. 学生と品質工学のかかわり

—学生として品質工学に携わっていたのはいつ頃のことか？

山村：2003年に大学の講義で、確か「確率統計工学」という講座名での授業がその始まりであった。講師は客員教授（当時）の矢野宏であり、内容は完全に品質工学であった。今にして思うと授業名と内容が合っているような合っていないようなという感じである。

江末：2003年に研究室配属のタイミングで矢野研

究室に配属となった。以降、修士卒業までの約3年間は学生として品質工学に携わっていた。

五味：大学3年生の時に、面白そうという気持ちのみで受講した。そもそも必修科目ではなく、実習後の講義であったため、自分と同じように興味本位で受講した学生が多かったように思う。授業内容は完全に品質工学であったが、それよりも授業の最初に、関わってきた企業の話をするとか、学生の質問にこれでもかと答えていることが面白かった。授業内容よりも矢野先生の面白さにひかれたようだとなれば思う。修士課程の時にも授業があったと思うが、こちらの方はあまり記憶にない。

—品質工学を中心としている研究室に入ろうと思ったきっかけは何か。

山村：先に記した矢野の授業において、品質工学は評価の学問であるという言葉があった。大学3年であった当時、就職のことも考えていたが、エンジニア的な職業につければ何でもいいという考えだったので、評価の学問であればどんな職種に就いても適用できそうだと思う、矢野研究室を志望した。また、授業における矢野の言動が非常にユニークだった点も大きかったと思う。

江末：品質工学に触れた一番初めのきっかけは、学部3年の時に受講した講義（確率統計工学）である。その時に、他の講義とは雰囲気少し違うなという印象を受けた。研究室を希望する際にその記憶があり、面白そうだなと思ったのと、品質工学は汎用技術であり、潰しが効くだろうと考えたこと、なにより他に特別ひかれるような研究室が無かったこともあって「矢野研究室」を選択した。いってしまえば消去法である。

五味：実は品質工学に興味があったというよりは、統計をやってみたかったという方が強かった。他の

*¹ (株)IHI

*² 福井工業高等専門学校

*³ (株)東海理化